

ベルクソンの麻痺論とフロイト—ベンヤミンのショック論

金子智太郎

序論

19世紀末から20世紀初めに大きな影響力を持ったアンリ・ベルクソン (Henri Bergson) の哲学は、後に実存主義、批判哲学、構造主義など、さまざまな立場からの批判を受けた。繰り返されたのは、彼の議論はもっぱら主観的、内面的で、客観的な文化、歴史の意義を見過ごしているという批判である。ベルクソンは人間の経験の連續性を「持続 (durée)」という概念で捉え、この概念にもとづく記憶論、進化論、道徳論などを展開した。しかし、彼の持続の概念は内面的なものにしか適用できないのではないかと問われた。

批判哲学のなかでも、ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) の「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」(1939、以下「ボードレール」) におけるベルクソン批判は特に重要だろう。なぜなら、近代的経験における記憶の重要性を主張するベンヤミンは、持続論で記憶に深い意義を認めたベルクソン哲学を評価するからである。その一方で、ベンヤミンは彼を次のように批判する。長くなるが引用しておこう。

記憶を歴史的に特定することは、無論ベルクソンの意図ではない。むしろ彼は、経験の歴史的な規定をすべて斥ける。こうすることで彼はとりわけ、そして本質的に、ある経験に肉薄するのを避けることになるのだが、じつはこの経験から彼の哲学が生じてきたのであり、あるいはむしろ、この経験に対抗するために彼の哲学が要請されたのである。その経験とはすなわち大工場時代の不毛で幻惑的な経験である。この経験のいわば自然発生的な残像として、補色的性格をもつ経験が現われる。ベルクソンの哲学は、この残像を詳述し定着しようとする試みである¹。

1 ヴァルター・ベンヤミン、1995.『ベンヤミン・コレクション I：近代の意味』、浅井健二郎編訳、久保哲司訳、東京：筑摩書房、pp.421-422.

ベンヤミンはベルクソン記憶論を評価する一方で、連續性、持続が近代文化における経験、例えば労働、都市、メディア、戦争などの経験とは正反対であり、彼がこのことを理解していなかったと批判している。このような文化的影響を考慮しないために、ベルクソンは持続や記憶が損なわれても、個人の主観的、内面的な努力で、つまり「直観(intuition)」に訴えることで回復できると考えるのだろう²。結果的に、ベルクソンは持続とは正反対の経験を描写したシャルル・ボーデュレール(Charles Baudelaire)と比較して、「はるかに歴史から遠ざかっている」³。

このような明確な批判は、ベルクソン哲学研究にとってひとつの出発点になるだろう。ベルクソンは本当にベンヤミンが言うとおり、持続と文化の関係を見失っているだろうか。ベルクソンは『創造的進化』(1907)では知性や言語が、『道徳と宗教の二源泉』(1932)では「閉じた道徳(morale close)」、「静的宗教(la religion statique)」などが持続を見失わせることがあると論じたことを、ベンヤミンが知らないわけではないだろう。しかし、このような個人の主観的、内面的な努力で克服できそうな文化ではなく、いわば集団的、客観的な文化、例えばテクノロジーが経験に与える影響をベルクソンはどうに考えていたのか。ベンヤミンの批判が重要な理由はもうひとつある。ベルクソンを批判して自己の記憶論を開拓するため、ジークムント・フロイト(Sigmund Freud)「快感原則の彼岸」(1920)の記憶論を参照するからである。つまり、ベンヤミンはベルクソンとフロイトというほぼ同世代の近代を代表する思想家を対比している。そこで、ベンヤミンの批判を検討することで、ベルクソンとフロイトの関係も考察できる。本論は以上のような疑問と関心をもって考察を始めた。

前もって本論の主張をまとめると次のようになる。ベンヤミンの批判に反して、本論はベルクソンもまた集団的で客観的な文化が経験に与える影響を彼なりの仕方で論じていると考える。ベンヤミンはいわゆる「内的持続の哲学」という一般的なベルクソンの印象に囚われているのではないか。むしろ、文化が経験に与える影響に関して、ベルクソンとフロイト—ベンヤミンには共通点も認められるだろう。これまでのベルクソンとフロイトの比較では、両者の相違が強調されることが多かった⁴。なぜなら、両者は無意識という用語を異なる意味で使うからである。それに対して、本論はネガティブな文化的影響の受容において両者に共通点があると主張したい。両者とも文化的影響が、生命が物質から身を守るために

2 Ibid., pp.422-423. 「しかしベルクソンの場合、生の流れを観照的态度でまざまざと思い描くことへ向かうかどうかは、自由な決断の問題であるように見える」。Cf. Crary, Jonathan, 1999, *Suspensions of Perception: Attention, Spectacle, and Modern Culture*, Cambridge: The MIT Press, p.327.

3 ベンヤミン1995, p.466.

4 ベルクソン自身がフロイトとの違いに言及している。Bergson, Henri, 1938, (1997). *La Pensée et le Mouvant*, Paris: PUF, p.81. (以下、ベルクソンの著作には発表年と本論文で使用したPUF版の発行年を並記する) Cf. Deleuze, Gilles, 1966, *Le Bergsonisme*, Paris: PUF, p.50; 松浦雄介 2002, 「記憶の不確定性——フロイトとベルクソン」, 『現代社会理論研究』, vol.12, pp.14-25.

作り出したシステムを通じて、このシステムの問題としてあらわれると論じている。そして、物質から生命を守るシステムが、反対に経験を危機に陥れるのである。こうして生じる経験の危機をベルクソンは「麻痺 (torpeur)」と呼び、フロイト・ベンヤミンは「ショック」と呼ぶのではないか。

本論は次のような構成からなる。第1節はフロイト「快感原則の彼岸」のメタ心理学とベンヤミン「ボードレール」のショック論をまとめ、経験が文化から受ける影響を両者がどのように理解するのかを見していく。第2節はベルクソン『創造的進化』を中心に、生命論を参照しながら麻痺の概念を詳細に検討する。

第1節 フロイト・ベンヤミンのショック論

序論で述べたとおり、ベンヤミンは「ボードレール」のなかで、フロイト「快感原則の彼岸」のメタ心理学を参照して近代的経験のあり方を論じている。ベンヤミンの用語法に正確に沿えば、近代に対応するのは「体験 (Erlebnis)」であり、前近代的な「経験 (Erfahrung)」とは区別される。この体験と経験の区別もフロイトのメタ心理学にもとづいて説明される。そこで、本節はまずフロイトの議論を参照し、次にベンヤミンがそれをどのように解釈したのかを順に見ていこう。ベンヤミンはフロイトが議論の出発点とした「戦争神経症」を近代文化一般に拡大することで、経験が受けるネガティブな影響を説明しようとする。

1-1 フロイト「快感原則の彼岸」におけるメタ心理学

「快感原則の彼岸」を理解するには、フロイトがそれまでの臨床的研究を通じて構築してきた「メタ心理学」、つまり心的プロセスの内容ではなく枠組みを押さえる必要がある。この枠組みの特徴として、彼は「局所論的」、「力動的」、「経済論的」の3つを挙げている⁵。中山元の解説によると、局所論的とは心的装置が複数のシステムによって構成されているとみなすことである⁶。「快感原則の彼岸」の頃には、意識、前意識、無意識という3つのシステムの区別があった。そして、力動的とは心的プロセスがさまざまな力の組み合わせであると理解すること、経済論的とはさまざまな力のエネルギーを量的に捉えることを意味する。

以上のメタ心理学にとって特に重要で、ベンヤミンのフロイト解釈の要点でも

5 ジークムント・フロイト, 1996, 「自我論集」, 竹田青鶴編, 中山元訳, 東京: 筑摩書房, p.115.

6 *Ibid.*, pp.115-116.

ある概念が「刺激保護」である⁷。有機体が外界の刺激から、つまり生命が物質から身を守るシステムが刺激保護と呼ばれている。フロイトは同論文のなかで有機体を可能な限り単純化して、未分化な小胞として捉えるという思考実験を行った。まず、この小胞は非常に強力なエネルギーで満たされた外界に囲まれているだろう。小胞の表面はこの刺激の一部だけを受容し、他の危険な刺激から身を守る必要がある。フロイトはこのような刺激保護を生命の最も原初的な機能のひとつとみなし、心的装置の形成をこの刺激保護に結びつけた。彼によれば、小胞の表面は絶えず外界からの刺激に晒されているため、半ば燃え尽き、死んで無機化している。そして、無機化のために、変化をほとんど受けつけなくなり、内部を保護するようになる。フロイトはこうして生じた有機体の皮膜の一部が、進化の過程で内部に取り込まれ、神経系になると指摘する⁸。そして、彼はこの表面と内部の分化を心的装置の局所論と重ね合わせる。刺激保護のために分化した皮膜、後の神経系を意識の座とみなし、皮膜の内部を無意識の座とみなす。

『夢判断』(1900) のなかで、フロイトは夢の分析にもとづいて意識と無意識の局所論的区別を論じていた⁹。意識システムは外界の刺激によって生じた有機体の興奮を知覚することができる。有機体に残った興奮の痕跡が記憶の基礎になる。ところで、この痕跡が意識に残されるならば、意識が新しい興奮を受け取る機能は制限されてしまう。そこで、フロイトは痕跡が意識システムに隣接する別のシステムに残されると考えた。そして、記憶の基礎となるこの別のシステムが無意識システムであるとされる¹⁰。フロイトは以上の心的局所論を先の刺激保護の概念と結びつけた。有機体の表面は絶えず外界からの刺激に晒されることで、変化をほとんど受けつけなくなっている。そのため、興奮の痕跡が残ることはない。そこで、興奮は表面—意識システムを通過して、隣接する内部—無意識システムに痕跡を残すのである。

以上の局所論をふまえ、次にフロイトが考える心的プロセスを形成するさまざまな力を理解しよう。フロイトは『夢判断』以降、有機体の内部において、多様な無意識的「欲動」から生じるエネルギーの働きについて論じている。意識は常に外界の刺激とこの欲動のエネルギーを受け続ける。そして、フロイトの想定では、有機体は絶えず内外から供給される興奮を行動によって外界に放出することで減少させ、状態を維持することに快を感じる¹¹。このルールが「快感原則」と呼ば

7 Ibid., pp.144-155.

8 Ibid., pp.144, 147.「高度に発達した有機体では、かつての小胞はすでに体内の奥深くに退いているが、その一部は全身を覆う〈刺激保護〉に守られて、体表に残されている。これが感覚器官である。これらの器官は基本的には、特定の刺激作用を受容するための組織を備えているが、過剰な量の刺激に対して新たな保護を行い、不適切な種類の刺激を防ぐための特別な装置も備えているのである。こうした器官には、ごくわずかな量の外部からの刺激しか加工しないという特徴がある」(p.147)

9 ジークムント・フロイト, 1969,『夢判断』, 高橋義孝訳、東京:新潮社, pp.388-396.

10 Ibid., p.394.「われわれの記憶は、本來無意識である」

11 フロイト1996, pp.115-118.

れている。ところで、意識は外部からのエネルギーに対しては刺激保護によって守られているが、内部には保護が存在しない。そこで、欲動が生んだエネルギーを放出することが意識にとって第一の課題になる¹²。現実的には、さまざまな欲動すべてを即座に放出することはできない。外界によって多くの欲動が阻まれる。対立し合う欲動もある。そこで、ある程度までそれらを待機させたり、調停させたりするのが、無意識と意識の中間に位置する前意識の役割である¹³。そして、欲動を現実的に満たすために必要なルールが「現実原則」と呼ばれる。フロイトは前意識の働きを、無意識の自由で流動的なエネルギーを「拘束」すると表現した。また、前意識の働きは人間の歴史のなかで次第に形成されてきたと述べている¹⁴。

1-2 ベンヤミン「ボードレール」におけるショックと近代的経験

「ボードレール」においてベンヤミンがフロイト「快感原則の彼岸」から参照したのは、先に見たメタ心理学の枠組みと、それにもとづく「戦争神経症」解釈である¹⁵。フロイトは同論文で、戦場での極端なストレスのために起こる戦争神経症の解釈を議論の糸口にしていた。彼は「シェル・ショック」とも呼ばれるこの神経症の原因を、有機体の刺激保護を突破する過剰な刺激の流入と考えた¹⁶。戦場での体験のような過剰な刺激が起こす興奮は、無意識におけるエネルギーの自由な流動に破滅的な混乱をもたらす。そして、この混乱を拘束するために心的装置のエネルギーが大量に消費される。その結果、「その他の心的な機能が広い範囲で麻痺したり、低下する」。したがって、フロイトが考える戦争神経症はたんに外界からの直接的な刺激によって引き起こされるのではない。刺激がきっかけとなり、混乱を收拾しようとする前意識の働きがシステム全体の機能不全を招く

12 Ibid., p.149。「まず第一に、装置の内部のプロセスの指針である快と不快の感覚が、他のすべての刺激よりも優位に立つ。そして第二に、過大な不快の知覚をもたらすような内部の興奮に対処する方法が採用されるようになる」

13 フロイト1969, pp.395-396, 490-494; フロイト 1996. pp.119-120, 156-157.

14 フロイト1969, p.497.

15 ベンヤミンのフロイト受容については、Cf. Weigel, Sigrid, 1996, *Body- and Image-Space: Re-reading Walter Benjamin*, trans. Georgina Paul with Rachel McNicholl and Jeremy Gaines, London: Routledge, chap. 8. 'From topography to writing: Benjamin's concept of memory'; 前川修, 2004, 「痕跡の光学: ヴァルター・ベンヤミンの「視覚的無意識」について」, 京都: 晃洋書房, 第五章「ベンヤミンと記憶モデルとしての都市」。

16 フロイト1996, pp.150-153。「[刺激保護が突破されると] 心的な装置が大きな刺激量によって満たされることは、もはやとどめようがない。そのため刺激を制御し、外部から入ってくる刺激量を心理的な意味で拘束して、処分できるようにすることが、新たな課題となる。[中略] 刺激が侵入した場所の周囲に、これに応じた高いエネルギー備給を行うため、身体のあらゆる場所から備給エネルギーが动员される。大規模な「逆備給」が行われるため、他のすべての心的なシステムが〈貧困〉になり、その他の心的な機能が広い範囲で麻痺したり、低下する」(pp.150-151 [括弧] 内は筆者)

のである。

ベンヤミンは以上のようなフロイトの戦争神経症解釈を、近代的経験一般に適用しようとする。まず、ベンヤミンは先に説明した彼の「経験」と「体験」、および「記憶 (Gedächtnis)」と「追想 (Erinnerung)」の区別を、フロイトの無意識と前意識－意識の区別に重ね合わせる¹⁷。フロイトにとって記憶が無意識の座であることは先に見たとおりである。ベンヤミンはこの記憶が前意識による欲動の拘束を通じて、「正確な時間的位置を指定」され、「反射」メカニズムに組み込まれると解釈した¹⁸。ベンヤミンによれば、このとき記憶は分解され、整理されて、現実的に役立つようになるが、「出来事の内容の完全性を犠牲にして」、彼が最も重視する伝統的な深みを失ってしまう¹⁹。ベンヤミンはこのような整理された記憶を「追想」と呼び、追想と結びついた経験を「体験」と呼んだ。「経験」は無意識的記憶の豊かさを持つのに対して、体験は貧困である。そして、体験が経験に取って代わるようになったことが近代文化の特徴であるとベンヤミンは考える。

ベンヤミンは体験の優位の原因として、戦争神経症を引き起こすような激しいショックが近代文化の「標準状態」になったことを指摘する²⁰。先に見たように、フロイトは有機体の刺激保護を突破するようなショックが無意識を混乱させて、前意識による拘束に有機体のエネルギーが費やされると考えた。したがって、ショックが標準状態になってしまふと、無意識は絶えず混乱させられ、前意識の働きが常に強調され、より多くの記憶が反射メカニズムに組み込まれる。つまり、より多くの記憶が追想に、経験が体験に変わってしまう。では、ショックが標準状態であるとは具体的にはどういうことか。ベンヤミンによれば、近代文化において例えば機械労働、都市の群衆、新しいマス・メディアなどがショックの源泉となる²¹。「大都市の群衆は、それをはじめて目のあたりにした人々の心に、不安、嫌悪、戦慄を呼び起した」²²。機械の作動は有機的な動作と比べて、より組織された反射メカニズムを労働者に要求する。新聞のもたらす情報の新しさ、短さ、情報どうしが無関係であること、なども近代的経験に恒常的なショックをもたらす。

スザン・バック=モース (Susan Buck-Morss) はベンヤミンが論じたこのようないくつかの近代的経験のあり方を、「麻痺」や「麻酔 (anesthesia)」という言葉で再考している²³。フロイトはショックを受けた有機体がエネルギーを混乱の收拾に費やす

17 ベンヤミン1995, pp.422-430.

18 *Ibid.*, p.430.

19 *Ibid.*, 「ショックがそのように捕捉され、そのようにして意識によって受け止められると、そのショックを引き起こした出来事は、正確な意味での体験の性格を与えられる。そうなるとこの出来事は、(意識的な追想のファイルにすぐさま編入されて)、詩的経験にとって不毛なものとなってしまう」(*Ibid.*, p.429)

20 *Ibid.*, p.429.

21 *Ibid.*, pp.424-425, 435-454.

22 *Ibid.*, p.448.

23 Buck-Morss, Susan, 1992, "Aesthetics and Anaesthetics: Walter Benjamin's Artwork Essay Re-considered", *October*, vol.62, pp.16-18.

ため、麻痺に陥り、神経症が起こると考えた。それに対して、バック=モースはベンヤミンの議論に沿うかたちで、標準化したショックによって経験が記憶との結びつきを失い、貧困な体験となった状態を麻痺と呼んでいる²⁴。さらに、彼女はベンヤミンの議論を拡張して、ショックを和らげるために麻痺を意図的に作り出す近代文化、例えば麻薬やファンタスマゴリアについて考察した²⁵。そして、このような議論を「麻醉学 (anaesthetics、非美学、無感性学)」と呼び、「美学 (aesthetics、感性学)」に対置した。

ここで、序論で言及したベンヤミンのベルクソン批判に戻ろう。ベンヤミンは「ボードレール」で、いわゆる「生の哲学」のなかでも、記憶論の決定的な重要性を指摘したベルクソン哲学を評価する²⁶。また、機械を扱う労働者と「ベルクソンが書いている架空の人物たち、記憶を完全に抹消してしまった人物たち」の類似にも言及している²⁷。両者は「メカニズムが彼らの心身を完全に崩しており」、「反射的にしか行動できない」「自動装置としての生活」を送っているという共通点がある。また、ベルクソンが豊かな「純粹記憶」と反射的な習慣としての記憶を区別したことも示唆している²⁸。この区別はベンヤミン自身の記憶と追想、経験と体験の区別に重なるものである。そして、ベンヤミンはこれらをふまえた上で、それでもベルクソンが純粹記憶と習慣としての記憶の関係を十分に論じていないと批判する。これも序論で述べたように、ベンヤミンはベルクソンが個人の経験に及ぶ文化の影響を考慮しないため、記憶が損なわれるがあっても個人の内面的、主観的な努力で回復できると考えた。そして、ベルクソンはこの文化的影響を理解しないため、彼の哲学は結果的に近代的経験の「残像」になっていると批判した。

とはいっても、本論はベルクソンが本当に経験や記憶に対する文化的影響を無視したのか、あらためて問い合わせたい。このような疑問が浮かんだきっかけは、ベルクソンが「麻痺 (torpeur)」という言葉を使って生命の危機的状態を論じていることである。先に見たように、フロイトやバック=モースもこの言葉を使って経験の危機を論じていた。ベンヤミンの批判は「内的持続の哲学」というベルクソンの一般的なイメージに縛られているのではないか。麻痺という言葉はベルクソン哲学においても、経験が純粹記憶との結びつきを失い、反射メカニズムに囚われてしま

24 *Ibid.*, pp.17-18。「工場システムは、人間の感覚すべてを傷つけながら、労働者の想像力を麻痺させる (paralyze)」(p.17)。「共感システム (synaesthetic system)」[バック=モースの用語で、フロイトの意識—前意識システムを指す]は身体を事故の外傷から、心を知覚的ショックの外傷から守るために、技術的刺激を受け流すように組織される。結果、このシステムは役割を反転させる。その目的は有機体を無感覚にする (*numb*) こと、感覚を殺すこと、記憶を抑圧することである」(p.18 [括弧] 内は筆者)

25 *Ibid.*, pp.18-26.

26 ベンヤミン1995, p.421.

27 *Ibid.*, p.454.

28 *Ibid.*, p.421.

まう状態を指す。そこで、この麻痺の原因を明らかにすることで、ベルクソン哲学における文化のネガティブな影響を指摘できるだろう。次節ではこのような問題意識をもって、ベルクソン『創造的進化』の麻痺概念を考察する。

第2節 ベルクソンの麻痺論

ベルクソンがそれまでの著作で確立した「持続」の概念を生物の進化論に応用したのが、第3主著『創造的進化』である。その第2章の章題は「生命進化の発散方向 麻痺、知性、本能」となっている。この章題は次のようなベルクソン哲学の概観を提示している。進化は扇状に発散する傾向を持ち、発散の先端にいるのが知性を発達させた脊椎動物、人間と、本能を発達させた節足動物、昆虫である。そして、発散のなかで先端に至らず、停止している生物、まず植物、さらに一部の動物、例えば軟体動物や棘皮動物がいる。麻痺という言葉は第一義的にはこのような進化を停止した生物の状態を意味する。「無気力」、「冬眠」というニュアンスが強いだろう。

とはいって、ベルクソンは人間が麻痺と無関係ではないと考え、麻痺の兆候は人間の内面に観察できると述べている。

これは私達それが自己の内で体験できることである。私達の自由は、これを確立する運動そのもののなかで、生まれかけの習慣を創造する。この習慣を不断の努力によって更新しなければ、自由はこの習慣によって窒息してしまう。自動運動が自由を待ち構えている²⁹。

この引用から、ベルクソンの考える麻痺の症状はフロイト・ベンヤミンが論じたショックの症状に近いのではないかと推測することができる。両者とも人間の経験が持っていたものが失われ、反射的、機械的になってしまふ状態を論じている。ベンヤミンは生命が身を守るために作った保護を突破するような刺激が、前意識の働きを過剰にし、豊かな記憶、経験を貧しい追想、体験に変えてしまうと説明する。そして、近代文化はこのような強烈な刺激にあふれ、ショックが標準状態になっていると論じた。では、ベルクソンが考える麻痺の原因は何か。本節ではベンヤミンがフロイトのメタ心理学を参照したように、ベルクソン哲学の生命論から始めてこの問題を考えよう。

29 Bergson, Henri, 1907 (1998), *L'Évolution Créatrice*, Paris: PUF, p.128.

2-1 ベルクソン『創造的進化』における生命、物質、身体

ベルクソンは私達が直接感じ取れる経験の連續性、つまり持続を生命の本質と考える。メロディーのように絶えず変化する、分割や停止を許さない流動が持続の姿である。経験が連續的であるということは、現在と過去が、つまり記憶が結びついていることでもある。

なぜなら、私達の持続は瞬間に置き換わる瞬間ではないからである。もしそうなら、現在だけしかあり得なくなり、現在のものに過去のものが続くことも、進化も、具体的な持続もなくなってしまう。持続とは前進しながら未来をかじり、ふくらんでいく過去の連続的進展である³⁰。

ベルクソンによれば、この連續性はたんに内面的、心理的、主観的なものではなく、記憶と結びつく行動にもあらわれる。生命の行動と物質の運動は、記憶との関係から次のように対比される。物質の運動がどんなときでもいわゆる自然法則に従うということは、物質の運動が過去にまったく影響されず、瞬間的であることを意味する。つまり、物質は記憶を持たない。それに対して、生命の行動は絶えず変化し、二度と同じにはならない記憶に影響される³¹。そのため、いかなる法則も適用できず、ベルクソンはこの意味で自由であるとみなす。

ベルクソンは以上に区別した生命と物質を、第2著『物質と記憶』(1896)において持続の一元論として統合する。彼は同著で近代物理学を参照して、物質はまったく記憶を持たないのでなく、最小限の持続、最小限の記憶を持つのではないかと想定した。最小限というのは、持続の連續性がきわめて弛緩しているということである。反対に、生命の記憶はより緊張している。そして、ベルクソンは持続の連續性にはさまざまな弛緩、緊張の程度があり、最も弛緩した持続が物質で、より緊張した持続が生命であると結論した³²。

『創造的進化』の進化論は以上のような持続論、生命論、物質論にもとづく。本節冒頭で生命の進化が扇状に発散するという議論を紹介したが、この発散は持続が無限の緊張度を持つことから説明される。ベルクソンによれば、持続は初めにあらゆる緊張度を含んでいたが、時間の経過、持続の進展とともに、異なる

30 *Ibid.*, p.4.

31 *Ibid.*, pp.5-6.

32 Bergson, Henri, 1896 (1997), *Matière et Mémoire*, Paris: PUF, Chapitre IV.「最初の区別は程度を持たなかつたことに注目する必要がある。[中略] 両者の間に可能な過渡的段階はない。反対に、もし精神の最も控えめな役割が物質の持続の起始的瞬間を結びつけることであり、もし精神が物質と接触するのはこの操作によってであり、また物質からまず区別されるのもこの操作によってであるとしよう。このとき、物質と完全に発達した精神の間には無限の程度があることが理解できる」(p.249)

緊張度の間に軋轢が生まれてしまう³³。そこで、さらなる進展のために持続は弛緩した持続と緊張した持続に二分化する。ベルクソンは一体の持続がまず生命と物質に二分化し、次に生命が植物と動物に、そして動物が脊椎動物と節足動物に、という仕方で発散していくと推測する³⁴。

ところで、ベルクソンは以上のような分化にいわば支えが必要であると考える。というのは、最も緊張度の低い持続、物質がより緊張した持続に抵抗し、分化を阻むからである³⁵。言い換えれば、物質は生命を記憶から切り離し、自由な行動を妨げようとする。そこで、生命は進化を続けるために物質の力を弱める必要がある。そして、ベルクソンはまず身体こそが物質の持続を一時的に無力化して、生命の分化を補助すると考えた³⁶。では、身体はどうやって物質を無力化するのか。興味深いことに、ベルクソンは身体と物質の関係を説明するために、フロイトのように最も原初的な生物のあり方を参照する。ベルクソンは原初的な身体が拡散するエネルギーを収集し、蓄え、爆発させることで、物質の内に一時的な非決定を作り出していると考えた³⁷。記憶を持たず、どんなときも法則に従う物質の運動を一時的に止めて、記憶が行動に影響を与えられるようにすることが、ベルクソンが主張した身体の役割である。

身体の補助がなければ生命は進化を続けることができない。そして、生命は身体の能力を発達させることで、分化を繰り返してきた。ベルクソンによれば、植物は太陽エネルギーを利用するため葉緑素を獲得し、動物は植物が作り出したエネルギーを利用するため神経系を発達させた。ベルクソンは神経系がエネルギーの爆発とは異なる独自の仕方でも非決定を作り出せると考えた³⁸。「人間の脳は無数の運動メカニズムを組み立て、絶えず新しい習慣を古いものに対抗させることができ、また自動装置を仲違いさせて、支配することができる」³⁹。次の文章にはベルクソンが想定する身体というシステムの役割が簡潔かつ印象的に記述されている。

33 「ただちに私の証明の原理を示しておこう。先に述べたように、生命は原初以来、ひとつの同じ跳躍の連続であり、それが発散した進化の線に分けられてきた。[中略] 両立不可能になることなく一定の点を超えて成長できない諸傾向が分離されるように導くのは、まさにこの発展である」(Bergson, 1907 (1998), p.53)。「しかし、分化の真の深い原因は生命が自己の内に持っていたものだった。というのは、生命は傾向であり、傾向の本質は束状で発展することだからである。生命は成長の事実だけで、その跳躍を分け持つ分化した諸方向を創造する」(Ibid., p.100)。「この不協和の深い原因は取り返しのつかないリズムの違いにある」(Ibid., p.128)

34 Deleuze, 1966, p.106.「差異化の概略的図式」参照。

35 「生命の跳躍は絶対的には創造できない。なぜなら、物質、つまり生命とは反対の運動と衝突するからである」(Bergson, 1907 (1998), p.252)

36 「ふたつの流れのうち、物質は生命に抵抗するが、それでも生命は物質から何かを獲得する。結果、両者の間に生存方式 (*modus vivendi*) が生まれ、これがまさに有機体である」(Ibid., p.250)

37 Ibid., p.253.

38 Ibid., pp.127, 184–185, 252–253.

39 Ibid., p.265.

問題は必然性そのものである物質を使って自由の道具を創造すること、メカニズムに打ち克つ機械を製作すること、自然の決定性を自然が張った網を通り抜けるために使うことだった⁴⁰。

2-2 ベルクソン『創造的進化』における文化と麻痺

ベルクソンは生命が進化するために物質から分化する必要があると想定した。そのためには、物質の内に一時的な非決定を作り出さなければならない。それが身体の役割である。ベルクソンの身体論は、主観的、内面的というベルクソン哲学に対する一般的なイメージとは異なり、実践的、具体的であると言えるだろう。そして、ベルクソンは人間の文化もこのような身体論の延長で論じている。

生命の進化のなかで人間において最も発達した知性は、なによりもまず道具を製作する能力であるとベルクソンは考える⁴¹。道具は身体の延長であるとしばしば言われるが、ベルクソン哲学においてはこの常套句がきわめて独特な意味を持つことに注意しよう。身体の延長ということは、道具が身体の非決定を作り出す能力をより高めるということである。ベルクソンは「知性による物質の掌握は物質に捕らえられた何かを自由に通らせることを主要な目的としていた」と述べている⁴²。そして、彼はこの道具製作がモデルとなり、知性の一般的な能力、論理や数学、科学が発達したと想定する。さらに、『創造的進化』では言語や社会も知性の延長として、まず道具製作の効率化と結びつけられて論じられる⁴³。したがって、ベルクソン哲学においては特にテクノロジーが文化一般の中心にあり、また文化は身体の延長であって、物質の内に非決定を作り出すこと、持続の分化を支えて生命を補助するためにあると言える。

ところで、このような身体や文化にある意味で内在し、不可避的に起こりうる状態が、本論で注目してきた麻痺である。先に述べたように麻痺は進化の停止であり、ベルクソンはその直接的な原因を身体に生じたアクシデントと考える。このと

40 *Ibid.*, p.264.

41 *Ibid.*, pp.138-158。「そこで、行動から出発し、知性は第一に製作を目指すということを原理としよう」(p.154)

42 *Ibid.*, p.184.

43 *Ibid.*, pp.158-160, 265。「人間の知性が製作を目指すことが眞実なら、製作や他の目的のために知性は他の知性と結びつくと付け加える必要がある。[中略] 言語が共同作業を可能にする」(p.158)
「言語がなければ、知性はそれが関心を持って考慮していた物的対象に釘付けされてしまうだろう。
[中略] 言語は知性の解放に多大な貢献をした」(p.160)。「言語は意識に非物質的身体を提供し、意識を受肉する。そして、意識が物質的身体に置かれ、物質の流れにまず押し流され、やがて呑み込まれることを防ぐ。[中略] 言語が思考を蓄えるように、社会生活は努力を蓄え、保存する」(p.265)。ベルクソンは社会を『創造的進化』においては知性と関係づけたが、『道德と宗教の二源泉』においては本能とも関係づけている。Bergson, Henri, 1932 (1997), *Les Deux Sources de la Morale et de la Religion*, Paris: PUF, Chapitre Premier.

き、身体が破壊されるわけではないが、その真の役割が忘れられてしまう。「まさに進化運動を分裂させる原因が、しばしば進化の途中にある生命の関心を自己から逸らせ (se distrait)、生命が作り出したばかりの形態に陶酔させる (hypnotisée)」⁴⁴。具体的にはまず、麻痺は行動の停止としてあらわれる。独自のエネルギー収集装置を作り出した植物や寄生動物は、その装置のために行動が大幅に制限するために、眠りにつき、無感覚、無意識、つまり麻痺に陥ってしまう⁴⁵。ベルクソンは棘皮動物、軟体動物、甲殻類、古魚類などの厚い外皮もまた、同じように生命を麻痺に追いやつたとみなす⁴⁶。「意識が行為のために蓄積したエネルギーは、意識が物質を誘導して作った限りなく微妙で、本質的に不安定な均衡を維持するために、ほとんどすべてが使われる」⁴⁷。次に、神経系を持つ動物において麻痺は自動運動としてあらわれる。先に引用したように、脳は非決定を作り出すために無数のメカニズム、習慣、自動装置を準備するが、「この習慣を不断の努力によって更新しなければ、自由はこの習慣によって窒息してしまう。自動運動が自由を待ち構えている」⁴⁸。要するに、麻痺は生命から自由な行動を奪い、物質と同じ状態に陥れ、記憶との結びつきを断つてしまう。フロイドとの比較で興味深いのは、この危機的状態をベルクソンは無意識と呼んでいることである。彼は2種類の無意識、「意識が無い (nulle)」無意識と、「意識が無くされた (annulée)」無意識を区別し、前者を物質の状態、後者を麻痺した生命の状態とみなす⁴⁹。このような麻痺の解消が困難なことは明らかだろう。物質に抵抗する試みが物質的状態を招くという逆説が麻痺の特徴だからである。

次に、知性が引き起こす麻痺を見ておこう。ベルクソンがしばしば言及するのが、物質で道具を製作するために作られた知性の枠組みを使い、生命を捉えようとする誤解である。この誤解はベルクソンが「可能的なものと実在的なもの」(1930)で、「疑似問題 (pseudo-problème)」と名づけた答えのない問題に知性を陥れる⁵⁰。疑似問題とは、例えば「なぜ秩序があるのか」、「なぜ存在するのか」といった問題である。知性はこれらの問題に取り組むとき、「存在、その原因、その原因の原因を考えて、無限に向かう行程に運び去られるように感じる」⁵¹。このような状態を知性の麻痺と呼ぶことができるだろう。この議論で特に重要なのは

44 Bergson, 1907 (1998), p.105. Cf. *Ibid.* pp.128, 265.

45 *Ibid.*, pp.111-113.

46 *Ibid.*, pp.131-132.

47 *Ibid.*, p.265.

48 *Ibid.*, p.128. Cf. *Ibid.* p.265.

49 *Ibid.*, p.144.

50 Bergson, 1938 (1997), pp.105-109; Bergson, 1907 (1998), pp.220-237, 275-298.

51 Bergson, 1938 (1997), p.106. Cf. Deleuze, 1966, pp.3-11. ドゥルーズは疑似問題が「不可避の幻想」であり、「解消される (dissipée)」ことはなく「追い返す (refoulée)」ことしかできないと説明する。

また、彼はベルクソンがこのような不可避の幻想というアイデアをイマヌエル・カント (Immanuel Kant) から借りたのではないかと想定している。

が、知性は非決定を作り出すためにあるということである。

身体や知性における麻痺についての議論を文化一般、特にテクノロジーに延長することができるだろう。知性と同じように、言語や科学が生命をとらえようとして生じる問題をベルクソンは繰り返し論じている。また『道徳と宗教の二源泉』では、社会を形成するためにある「閉じた道徳」や「静的宗教」が生命の自由な行動を抑圧することがあると論じている。道具製作の延長としての一般的なテクノロジーについてはどうだろうか。

『創造的進化』にはまとった記述はないが、「工学 (Mecanique) と神秘学」という副題のついた『道徳と宗教の二源泉』第4章で、ベルクソン同時代のテクノロジーについて概略的な議論を展開している。まず、ベルクソンはテクノロジーが人間を機械に変えてしまうという批判は的外れであると指摘する⁵²。これまで見てきたように、テクノロジーは身体の延長であるからである。また、彼はテクノロジーが過剰な欲望を駆り立てるという批判も支持しない⁵³。この批判に対して、多くの近代的な機械の原型がはるか以前に考案されていた事実を指摘している⁵⁴。ベルクソンが近代におけるテクノロジーの問題と考えているのは、不均衡の拡大である。彼は「転轍機のアクシデントによって、工学はすべての人々のための解放ではなく、特定の人々のための過度の安楽と贅沢を終点とする線路を進ませた」と述べている⁵⁵。また、次のようにも主張する。

機械化が現実的欲求を満たす手段を大きく発展させることで人間に貢献した働きに異議を唱えるのではない。人為をあまりにも助長し、贅沢を推し進め、地方を犠牲にして都会を優遇したこと、雇用者と労働者、資本と労働の間の隔たりを拡大し、関係を変えてしまったことを非難しているのである⁵⁶。

そこで、このような不均衡の拡大がいわばテクノロジーによって生じる麻痺と言えるだろう。個人的、主観的な側面の強い知性や言語、道徳とは異なり、テクノロジーは明らかに集団的、客観的な性格が大きい以上、この麻痺は個人の努力だけでは回避できないだろう。とはいって、ベルクソンがまず提案するのは、身体の延長となって非決定を作り出すというテクノロジーの真の機能を意識することである⁵⁷。

52 Bergson, 1932 (1997), p.327.

53 *Ibid.*, pp.310, 324.

54 *Ibid.*, p.324.

55 *Ibid.*, p.329.

56 *Ibid.*, p.327.

57 *Ibid.*, pp.330, 333.

結論

ベンヤミンのベルクソン批判にもかかわらず、フロイトーベンヤミンのショック論とベルクソンの麻痺論を詳細に検討することで、両者と共に通点を見いだせるだろう。本論の結論として、もう一度この共通点を整理しておきたい。

序論で前もって述べたように、無意識論については異なるベルクソンとフロイトーベンヤミンだが、文化が経験に与えるネガティブな影響については共通点が認められる。フロイトーベンヤミンのショック論では、近代文化におけるショック状態の標準化によって、有機体の刺激保護が働きを損なわれてしまう。そして、刺激保護の下で働いていた前意識がいわば暴走し、無意識と意識の直接的な結びつきが断たれる。その結果、記憶は全面的に反射メカニズムに組み込まれ、豊かな経験が失われてしまう。ベルクソンの麻痺論では、身体や人間のさまざまな文化、特に道具、テクノロジーが内在的なアクシデントによって麻痺を招いてしまう。このとき、これらのシステムから物質の内に非決定を作り出し、生命の自由な行動や記憶の働きを支えるという、本来の働きが失われる。そして、生命は主にこれらのシステムを維持するためにエネルギーを浪費し、自動運動の虜になってしまう。フロイトーベンヤミンのショック論とベルクソンの麻痺論には、文化の影響によって記憶の働きが損なわれ、反射や自動運動に置き換えられるという共通点がある。またこの影響は、生命が物質から身を守るために作り出したシステムを通じて、このシステムの問題としてあらわれるという共通点もある。物質から生命を守るシステムが、反対に経験を危機に陥れるのである。

では、以上のような共通点からどのようなことが言えるだろうか。ベルクソンとフロイトーベンヤミンは同時代の産業の急速な発展を前にして、それが経験に与えるネガティブな影響に目を向けた。このとき、フロイトの局所論的、経済論的メタ心理学や、ベルクソンのエネルギーの爆発や神経系への注目に見られるように、両者は生命を考察するときも同時代のテクノロジーの影響の下にあったと言えるだろう。フロイトは無意識、ベルクソンは持続という概念で、一見内面的で主観的な生命を論じているにもかかわらず、両者とも生命と物質との緊張関係を精巧なシステムが媒介していると論じた。そのため、両者は文化と経験のネガティブな関係をたんなる機械と生命、物質と精神の直接的な対立とは捉えずに、生命のシステムの内部で複雑なアクシデントが生じていると考えたのではないか。本論はまず両者の共通点を考えることに集中したが、その意義の検討は今後の研究で継続していきたい。

Bergson's Theory of Paralysis and Freud-Benjamin's Theory of Shock

KANEKO, Tomotaro

In “On Some Motifs in Baudelaire” (1939), Walter Benjamin criticises Henri Bergson for his disregard of the influence of modern culture on human experience. Both of them emphasise on the significance of memory in experience, and Benjamin appreciates Bergson’s theory of memory to a certain degree. Nevertheless, he adopts Sigmund Freud’s meta-psychology rather than Bergson’s in his essay. It is the analysis of war neurosis in Freud’s “Beyond the Pleasure Principle” (1920) that Benjamin particularly pays attention to. Benjamin considers that the experience of shock which could cause war neurosis has been normalized in modern culture. On the other hand, Bergson regards “paralysis (torpor)” of life as an important aspect of the evolution in his *Creative Evolution* (1907). Paralysis indicates a state in which life is captured by automatism and loses freedom on his terminology. Besides, both shock and paralysis are considered as the disconnection between human experience and her/his profound memory. This thesis attempts to compare Freud-Benjamin’s theory of shock and Bergson’s theory of paralysis, and explore their understanding of the influence on modern culture on experience.

**東京藝術大学
美術学部
論叢**

**JOURNAL OF
THE FACULTY OF
FINE ARTS
TOKYO UNIVERSITY OF
THE ARTS**

第5号

**平成21年3月
MARCH 2009**

**東京藝術大学美術学部
THE FACULTY OF
FINE ARTS,
TOKYO UNIVERSITY OF
THE ARTS**